

戯曲『テッサ』における男たち

宮村 一 幸

ジャン・ジロドー作「テッサ」全3幕6 場 一幕

春のチロル高原、雪の残る峯々の頂。山荘のまわりをうろつく牛の鈴の音がのどかに聞こえる。

“やさしい大地よ

軽く抱いてやってくれ

お前にも重くなかったあの娘だ”

ルイスが作曲しながら小声で歌っている。幕開きのこの歌は、来たるべき女主人公の運命を暗示してやさしく、しめやかだ。

ところがここの住人達が“変わったふうにとり散らかされた広間になだれ込んで来る”やいなや“自由な精神と芸術だけがかもす雰囲気”にあふれかえる。ヤカマシイー!! 山荘の主はイギリス人の作曲家サンガー。彼の率いる家族は、一番上の娘がケイト、彼女の母親はおとなしい女性だったとある。18歳のトニーと17歳に近いテッサ、16歳のリーナの3人娘と13歳の男の子セバスチャンはイギリス社交界の女性でサンガーにとって6番目の妻を母に持っている。現在の妻リンダは11番目、その娘スザンヌは9歳になる。サンガーは音楽と女性に情熱的な男だ。彼らと15年来のつき合いで居候している新進作曲家ルイス・ドッド。客にきて泊まりこんでいるヤコブ・ビルンバウム。召使のロベルト。この大家族にまたお客がやってきた、バレエの振付けをするキルル・トリゴリン。借金だらけのサンガーは2階の一室にこもったきり姿を現わさない。アルコールを一滴でも飲ましたら死ぬ、と医者に言われているほど悪い状態のアル中である。サンガーを敬愛するルイスは、ここの子供達と一緒に父

親の誕生日祝いに演奏するコーラスを作曲しているのだ。題名は「リュクレス・ボルジア家の朝食」悪名高き、悪い噂のボルジア家、真偽のほどは解らないが毒殺が得意と言われている、その危険な朝食が題名なのだ。

ボルジア家はスペインの出で、短期間に多くの人材を出して有名になった家系である。法王アレクサンドロ六世となったロドリゴ (1431-1503) は、法王の位につき自分の権力が絶対的なものになると、数人の女性に産ませた子供達を認知して、家族と共に政治的策略をほしのままにした。ちなみにイタリアルネサンス期は、嫡出子も庶子も同等に扱われ、むしろ庶子が大手をふってまかり通った私生児の世紀と言われている。チェーザレ(シーザー)という古代ローマの英雄と同じ名を持つ法王の次男は、美貌に恵まれ知力にあふれ、イタリア統一とその支配という野望に権謀術数をめぐらしていた。リュクレスはその美しい妹で、父法王からも兄弟達からも愛されていたが、兄の冷酷な野心は彼女の夫達も犠牲にしてゆく。道徳観念からかけ離れた存在として有名な一族だった。

サンガーやルイス達のチロルの山荘での自由な日々も、ロンドンの常識人達の目には、道徳観念のない青年と美女達の武勇伝、と噂され、勤勉さと誠実さに欠けたスキヤンダルとしか写らない。ひとの事はホットイテくれ、一度しかない自分の人生だ。独創的な個性を生きる、価値からの自由の賛歌をルイスはサンガーに捧げる。サンガーは言っている。“ドライで残酷で冷酷非情な音楽に人は拍手する”ルイスはサンガーの中に自分流の法王をイ

メージしている。

キリル・トリゴーリンはサンガーの最新作のオペラのバレエを振付けたのが縁で招かれ、大感激でやってきたロシア人。サンガーとルイスの大ファンで、音楽の絶巔をきわめた大作曲家、天才、と絶賛を惜しまない。だが客として丁重に應對したのはセバスチャンだけで、サンガーはついに会わないままに死んでしまう。彼は何だったのか。誕生日のコーラス「ボルジア家の朝食」でピアノを弾いた。彼はルイスの雑な草稿でピアノが弾ける。歌う人でないと泊めない、とおどされて無理やりに法王役を歌わせられた。それだけだったのか、そうではない。“お話を耳で”味わえる音感のいいこの人は、恍惚とリンダに見とれていた。山荘に着くなりリンダの虜になっていたのだ。サンガーが死に皆がリンダを持ってあます時、リンダとスザンヌを引き取るハメになる。丁度良いところに来合わせた丁度良い人物だ。リンダはサンガーの容態が危ない事に気づいていた、船が沈む時ネズミはいち早く逃げ出す。リンダは来る人来る客を物色していたフシがある。家庭的なケイトに対して、ルイスが言うように動物的な女である、スザンヌ込みで楽な生活をさせてくれそうな人を見つけてモノにする。サンガーの船がついに沈む時、キリルがタイミングよく間に合う。バレエの仕事でウィーンに呼ばれていると皆の手前をつくろいながら、サンガーの最後の妻と最後の子供を連れてゆく、サンガーの後仕末をする助け船であった。

戯曲を読む楽しさの中に、作者の思考を追いかける仕事がある。セリフとト書で書かれたお話の組立が判りだす頃、いつも思う、作者がいかにかそのお話に都合のいい人物ばかりを登場させているか。必要な時に必要な人物を登場させ、必要な仕事をさせ、役立たずになって退場させる。お芝居だ、何人出そうと消そうと一人の作者の思考単位と言えればそれまでだが、お見事という他はない。

ビジュアルな面においても都合のいい対比が示される。なぜトニーは輝くばかり美しい大柄な娘なのか、男たちもヤコブは太鼓腹でキリルはふとっちょでサンガーは(姿はないが)大男、ケイトは物静かでおとなしい。これらは全てテッサとの対比に他ならない。テッサは、“見かけ

は悪いけど野に咲いた花”であり、“天使”であり、心臓弁膜症のやせっぽちな娘なのだ。だが、発作で倒れたり気分が悪くなったりするにもかかわらず、ケイトよりおとなしくない、ほがらかで、気転のきく、おてんば娘だ。観客は健康でグラマーな娘やボリュームたっぷりの男達の中で、きゃしゃで病弱のテッサがけなげにも力いっぱい生き生きと生きようとしている姿を見る。観客はハラハラしながらきたるべき悲劇を楽しむように設計されている芝居を見る。

ヤコブ・ビルンバウムは劇場を15も持っている大金持のユダヤ人である。ユダヤ人の典型に描かれていてケチだが、サンガーを発見してお金を貸し、劇場を貸し、バックアップしてきたパトロンである。でぶで見栄坊で、何でもお金で買えるとかからさまに口に出す雑なところをもっているが、子供達は親しくキキと呼んで友だちにしてきた。このヤコブを輝くばかりに美しい誇り高い18歳のトニーが愛してしまった。恋は思案のほかとやら。皆に内緒でミュンヘンのヤコブの家へ婚前旅行する程の仲になっても、トニーは自分自身が信じられない。2人の喧嘩はすさまじい。レストランではトニーが7ヶ国語で“でぶの大喰い”とどなりちらすやら「ボルジア家の朝食」の稽古中には、ゴツンと床に落とされてヤコブが“乞食女”とののしり、トニーに“この豚!”と逆に顔をひっぱたかれたりの大騒ぎで稽古もできない。ヤコブは2人の旅行の言いわけにサンガーにコニャックを贈る、アル中がアルコールに目がないのを知っているのに。最後の一滴まで飲み干してサンガーは死んだ。

トニー：愛するってどんな事だと思う？

テッサ：あんた彼を呼ぶ？火事や死人を見たら……

サンガーが死んだ時、テッサはルイスを呼び、トニーはヤコブを呼んだ。テッサとルイスの愛が深く静かに底流として流れているのに対比して、ヤコブとトニーの仲は滝のように急流のようにはげしい。

テッサ達の母の兄チャールズ・チャーチルがサンガーの後仕末に呼寄せられた。ケンブリッジ大学の教授で、常識人で立派な親戚である彼は、自分の妹の子供達を路頭に迷わせておく事はできない。セバスチャンは寄宿舎

に入れられようとするときっぱりと、決定は自分達でする事をチャールズに告げて驚ろかせる。“僕達はあなた達に従属してはいません”これはサンガーのやり方だ。呆気にとられたものの大人で良識の持主チャールズは、私達は君達の親類だよと穏やかに事をはこぶ。セバスチャン少年は父がアル中になってからは、サンガー家の家長役、ゴッドファザーを務めねばならないと自覚している。サンガー家はマチスト・男性優位の家族だ。穴熊の巣さがしにほっつき歩いている子供でもあるセバスチャンを作者はほほえましく見守っている。ト書に“一種の気どりと気品をそなえている”とあるが、常識と行儀もそなえている上に年長者の意見を聞く知恵を持った民主的なゴッドファザーである。トニーがヤコブに誘惑されたと思ひこんで決闘しようとした時「自分の家族がこんな目に会った場合あなたならどうお考えになる？」とルイスにたずねている。セバスチャンはサンガーを父に持ちサンガーを背負っているが、まぎれもなくチャールズの甥である。若き日のチャールズはセバスチャンであり、年老いたセバスチャンはチャールズなのだ。

寄宿舎が我慢できそうにないという口実でトニーはヤコブと結婚する決心をする。あきらめかけていたトニーの承諾にかえってとまどってしまうヤコブをセバスチャンが元気づけて、チャールズ伯父さんの許しをもらえるようにしてやる。ヤコブはサンガーを発見しサンガーを殺した。この時点ではユダヤ人のヤコブが生殺与奪権を持っていた、そして“ほしくてたまらなかったもの”をあっさりと手に入れた。対して、ルイスとテッサは？

チャールズがチロルの山荘にかけつけて来た時、娘フローレンスを伴っていた。彼はルイスが居る事を知らない。寄る辺を失くした狼の前に食べ頃の羊が持参されたという寸法である。フローレンスはルイスにすっかり参ってしまう。上流社会で平穩に育ったちょっと勝気なお嬢様にとってワルの匂いは魅惑的だ。“月並な教養の枠に閉じ込められないで本当に偉大な男と結婚してその人を助け励ます、これ以上立派なことは考えられません”とフローレンスが言い出した時、チャールズはそっくりそのままの言葉を彼女の叔母、自分の妹がサンガーと恋に

おちる前に言ったのを思い出す。

フローレンスのモーションに気付かない程ルイスはボンクラじゃないし、美しい種類の女性にはもろいタチである。後はどうなれまらず目の前に差し出されたご馳走をいただかない手はない。ルイスはマチョ・雄である、法王サンガーの歩んだ道をルイスも進む。しかしテッサの母と同様に社交界のお嬢様だから結婚しなきゃ自分のものにできない。ルイスのダメモトの申し込みをフローレンスは向う見ずにも了承する、自分の力で彼を変える事ができるという自信をもって。ルイスが“ちょうど一国の首都を必要とする頃”という彼女のセリフは見すごせない、ルイスにとって確かにチャンスは必要だった。必要な時に必要なものを出没させる、お芝居である。

ルイスはイギリスの社会党の代議士フェリックス卿の息子だった。声学家の姉がいる。15年間ルイスとつき合ってきたサンガーの子供達は、彼の家族の事などついで知らなかった、こだわらない一家なのだ。対してフローレンスは違う、ルイスの履歴を知りたがる。家柄にふさわしく厳しく躰けられてきたルイスは16歳の時、窮屈な寄宿舎を逃げ出してスペインに渡ったのだった。道徳やマナーの面でピレネーの北の国から胡散臭がられている国へ自由を求めて飛び込んだルイスは、そこでサーカスのコルネット吹きとして働く。酔っぱらって喧嘩するのが大好きなルイスには居心地の良いなじめる世界だったので、サーカスの楽隊のための作曲までするようになる。彼はそこで生きる術を学び、愛する術、愛される術を学んだに違いない、さすらう芸人達における男女のつき合いを。現実生活には欠けるが現実を見る目を持ち、対応し生き残ってゆく「典型的な自由奔放な男性芸術家」と世間の人がイメージする人物にルイスは育った。よくある人生パターンである、何歳までは判るが、その後不明、空白の時期があつて、やがてまたはっきりとする。ルイスのサーカスの世界に身を置いたというナゾの生活も、世間知らずのフローレンスには“心をわきたたせてくれる”事ではない。

サンガーがルイスの音楽にはサーカスの匂いがすると

言ったのはどんな匂いだったのだろう。サンガー一家と共

子供達が早くも俗世の人間と一緒にいるのを見るのがたまらない、いつまでも子供だと思っていたのに。かと言って自分が保護者になり得ない事もよく解っている。ともかくも16歳までは厳しい教育環境に身を置いていた自分に比べ、まともな教育を受けず、自由奔放に、とぎすまされた感受性のみを頼りに生きているサンガーの子供達の行く末を気づかわずにはいられない、遅かれ早かれ身持が悪くなる。彼はそういう女性達を沢山見てきたのだ。

一家の子供達にはもちろん、ルイスにもずっと影響をあたえ続ける姿なき登場人物サンガーは、流れあるく音楽家だった。まともな環境に落ち着くことを嫌い、ヨーロッパ中を家族と、大変なドンファンというゴシップと共にめぐり歩いた。スペインではルイスと出合い、イタリアではロベルトを召使にし、ベルギーの下宿にも子供を残して。ついに彼の終焉の地となったのがチロルだ。ヨーロッパのド真中の国である。作者ジャン・ジロドー(1882-1944)の劇作の時期は1934年から1944年だから、作品制作時のオーストリアはスイス・ドイツ・チェコスロバキア・ハンガリー・ユーゴスラビア・イタリア・リヒテンシュタインの7ヶ国に囲まれていた。古くはハプスブルグ家の華やかな歴史を持ち、ウィーン古典派の音楽家ハイドン・モーツァルト・ベートーベンという御三家を生み出した音楽のメッカである。自由気儘な放蕩の音楽家サンガーにとっては伝統的なウィーンではなく、郊外のチロル高原に眠れる方が本望だろう。ここにも対比がある。ヨーロッパの芝居だなあと思う。舞台はチロルから始まりイギリスに渡り、ベルギーのブリュッセルで幕になる、国境なきドラマである。登場人物はイギリス人、ロシア人、ユダヤ人、イタリア人、ベルギー人、そして作者ジロドーはフランス人。まさに外交官作家の面目躍如というところだろう。彼は男性の登場人物にヤケに親切だ、ト書からして最良目である。

キリル・トリゴリン：ふとっちょのバレエ振付師。丸顔。純真な好人物。

ヤコブ・ビルンバウム：太鼓腹の見栄坊。しかし純真な好感のもてる男。

チャールズ・チャーチル：身なり物腰のきわめて正しい六十男。陰鬱さと人の好きさが表情に出る。となってい

にくらしてきたルイスには、ゆりかごから寝かしつけた

る。作者の愛情が感じられる。基本に忠実な芝居づくりでありながら、縦、横、斜めに行き交うセリフのエスプリは、どこをカットすることもためられる。さりげなく散りばめられた対比の妙も心憎い。悪人は出てこない。女性が主人公のようにになっているが、夫のためを思うあまりにフローレンスは嫌がられ“あなたのいいように愛してちょうだい”と言うテッサは皆に可愛がられるが死なねばならない。つらい生き方の女性陣に比べて男達は、各々自分に合った方向で活達に生きている。実にのびのびとしている。なぜ作者はこのように描いたのだろう。

二幕

舞台はロンドンに移る。ルイスとフローレンスのと言うよりフローレンスが買い、飾りつけた、テムズ河に臨むチャールズ2世時代風の邸宅である。サンガーが死に、トニーはヤコブと結婚、テッサ、リーナ、セバスチャンはイギリスの寄宿舎に入り、ロベルトはフローレンスと結婚したルイスに従って彼らの召使となっている。

ノーベル賞作家のカミロ・ホセ・セラによると「召使の条件は、左翼でないこと、左翼が似合うのは作家、芸術家だけ。右翼でカトリック信者でキリスト教的あきらめの境地に達していること」。サンガーから給料をもらっていたとは思えないロベルトも役柄を心得た人物として描かれている。“耳ばかり”の一家の中で音楽に対する感性、センスを認められていた。誕生日のコーラスではチェーザレの大役が与えられていたほどだ。人に丁寧でユーモアもある男だからフローレンスは上流社会の体裁に合うように仕込もうとする。この“家柄”とか“体裁”こそルイスが大嫌いで逃げ出してきたところなのに。立派な人生だとか芸術の貢献なんてことに何の価値感も持たず、それに逆らうことを喜びとしているルイス。自分の手で彼を更生させてロンドンの寵児にしてみせようと躍起になっているフローレンス。2人の諍いを否応なく見ているロベルト。芝居に必要な人物を登場させて必要なシーンをつくる、ロベルトは作者にとって恰好のジョ

ーカーだ、いつでもどんな風にでも使える、存在してい閉じ込めておきながらロベルトを忘れてしまっていたフローレンス。チェホフの『桜の園』の終幕でも家僕のフィールスが空家となった屋敷に忘れおかれる。出場も少なくセリフも少ないロベルトだが、常識と非常識の境目に常に佇んでいて、サンガーの子供達を庇い頼りにされている。それは男らしく雄々しく立ち向うやり方ではなく、乳母のように優しく密やかになされる。父親サンガーの影の濃いこの芝居で、母親のそれはあまりにも少ない。“ロベルト”を必要とするために。

日本の古代芸能に「もどく」という芸がある。権力者や逆らえない相手に対して、その人のしぐさや話しぶりをそっくりそのままトボケた仕方で真似をする。それは弱者のせめてもの抵抗、自由を求める心の表現と云われる。ロベルトは、フローレンスが用を言いつけて繰返させると、全くそっくりそのままの言葉を真似て繰返す。ト書にも“茶を出す英国流の身振りを事細かに真似る”とある。彼の上流社会に対する気持が示されている。

このギクシャクしかけている家に、テッサ、リーナ、セバスチャンが寄宿舎から逃げ出してやってくる。自由気儘の虫がうずうずしていたところのルイスは大喜びだが、フローレンスにとっては苛立たしかぎりだ。よりによって、大切なお客を迎えてルイスを披露するパーティの日である。彼女の呼んだ客は、名付け親で芸術院院長で、イギリスの音楽の運命を双肩に担っているバートルミー卿。オーケストラ指揮者の第一人者ドーソン氏。そして事もあろうに、外交官夫人で社交界をきり廻しているルイスの姉グレゴリー夫人。フローレンスは彼女にルイスという車に油をさしてもらおうつもりだ。一方、ルイスの呼んだ客はヤコブとトニーの夫妻だった。ヤコブは来春ルイスの演奏会を開く計画をしている。必要な時に必要な人物を登場させるこの芝居で、これだけ極端な人々を集めたのだから、サアサア ドウスル 何が起こるのか？

バートルミー卿は、古き良き時代を引きずっている典型、新しいことと突飛なことに嫌悪感を持っている頑固な保主々義者の代表にされている。だが、批評の巾の広さを誇っているので若者を理解しようとしている姿勢も示したい。愛する名付け子フローレンスのたつての頼みで

るが目立たないのが召使だ。コンサートの日、テッサもある、ルイスとも機嫌良くつき合いたい。聞けば社交界をきり廻しているグレゴリー夫人のルイスは実の弟だという、無視するわけにはゆかない。そんなこんなでやって来た彼としては精一杯気を遣う、歩み寄ろうとする努力はいじらしいくらいだ。“イギリスにはいかなる音楽が必要であるか” 卿の長広舌の最中にトニーとヤコブが登場する。トニーは宝石に覆われて孔雀のような盛装である、そしてお腹が大きい。ルイスはトニー達の方に気が散ってしょうがない。卿は彼の手を取り、逃がすまいと心を決め“親友……こう呼ばさして下さい” 引き止めようとヤッキだ。そこへ、突飛な色の皺くちやのドレスを着た（寄宿舎の制服以外これしか持ってない）テッサとリーナが登場。卿の問いかけには答えずに、恭々しいお辞儀ばかりを繰返す。セバスチャンが補足する、“姉達は昨日、作法の授業で動かぬ銅像のようになれと習ったものですから”

卿は話し続ける“尊大ぶらず過激に走ることのない楽曲……イギリスの家庭はそうした曲で慰められ……” お客を間においてトニーは妊娠している事をテッサやリーナに身振りで判らせようとする。テッサ達はしゃっちょこぼった銅像を演じているからスムーズに身振りができない、そこを何とかダンマリで伝え合おうと必死の努力。そんな身振りの遺取りがお客達をはさんで飛び交う。ヤコブは慌てて遮ぎるが、こんな大好きのルイスは目くばせで子供達をけしかける。“若々しい騒々しい雰囲気が垂幕のように中央のグループをとり囲み始める” サンガー一座の勢揃いにバートルミー卿は歩が悪い。

そんな場面に笑いを誘われる劇場の観客。耳では真面目な卿のセリフを聞きながら、目では娘たちの声なきおしゃべりを追いかけて笑ってしまう。対比のうちに結果的に卿は笑われ、彼を後楯にしているフローレンスも笑われる。ルイスの世界とフローレンスの世界が相入れないことがはっきりと示されるこのシーンは、観客に退屈なバートルミー卿の演説が必要なものとなる。芝居の必要のために不必要に思われる退屈なセリフが必要になる。

ルイス自身の演奏で作品を聞きたいと所望するバートルミー卿に、彼は心よく承知して姉を驚かせる。“フローレンスあなたのお蔭でルイスは変わったわ” 喜ぶのは早

すぎた。ルイスは「豚を愛した貴婦人」のふざけた曲を弾いて歌うのだった。"銀の小屋建ててあげるわねえあなたトンちゃん ブーブーブー" 今度はフローレンスが動かぬ銅像になる番だ、いやバートルミー卿も。この気づまりな最悪の状況を救ったのはやはりロベルトだ。"奥様お食事の用意が出来ました" まさにグッドタイミング、ロベルトは大切なジョーカーだ。

チャールズは心配している、寄宿舎から逃げ出した後、フローレンスとルイスの家に居候しているサンガーの子供達。特にテッサはまたとない奇抜な姪であり、墮落を免れている心とエスプリは彼のお気に入りだ。彼女にきちんとした教育を身につけさせてやりたいという気遣いは、ルイスが寄宿舎に入れようとした気持と同じものだ。チャールズは寄宿舎をちゃんと卒業した人であり、ルイスは寄宿舎を経験したが逃げ出した人ではあるが。チャールズは危機を感じている。テッサの躰に敵しすぎるフローレンスに、もっと寛大になってやりなさいと忠告する。"気をつけないと、お前はあの2人をそれぞれ決心させ行動させるように仕向けてしまうよ"

フローレンスは2人を追いつめてしまう。しかし彼女をそこまで追いつめたのは男達だ。男達はテッサをまだ子供として扱って育ててやるつもりだった、チャールズもルイスも、ヤコブまでがテッサに優しくしてやってくれと頼む。打てば響くテッサの才気、男達との打ちとけた会話、ルイスのお気に入り、妻の座が脅かされたと感じるのももっともだ。ルイスとフローレンスの言い争いの最中、テッサが宿題の質問をする。"ワートルローの戦いに勝ったのは誰?" ルイスは"法王だよ" と答える。ワートルローの戦いでナポレオン軍に勝ったのはプロイセンとイギリスの連合軍だ。ルイスは法王サンガーの生き方に戻ることをきめた、法王サンガーと自分がフローレンスに勝った事を告げたのだった。ついにフローレンスは孤立無援になってしまった。ルイスの演奏会の夜、彼女はテッサを閉じ込めてしまう。"出して! チャールズ伯父さん" テッサを助け出したのはロベルトだった、フローレンスは彼を閉じ込めておくのを忘れていた、またまたタイミングのいいロベルト。

三幕

ルイスの演奏会場へかけつけてきたロベルトとテッサ。彼女の身体の工合は悪い、しかしフローレンスと言いつ争っているうちに、ルイスと共に家を出る決心をする。その事をロベルトはルイスに告げ、セバスチャンにも告げる。サンガー家の問題だ、セバスチャンは家族会議を開く。といっても今や、リーナとロベルトと自分の3人だけなのだが。リーナは女としての立場から賛成するがロベルトは判らないと言う。"ルイスがそれ以上に判っているはずがない" とセバスチャンは判断する。ロベルトの方がルイスに比べてはるかに常識を備えていると見ているのだ。この家族会議は演奏会場のホールと楽屋の中間で開かれていて、演奏会と会議は同時進行の形に描かれている。シンフォニーが終るまでは指揮者ルイスは絶体に表われない、終るまでに会議の結論を出さなければならない。今やホールではシンフォニーの最終楽章にさしかかった、子供達とロベルトは耳をすます、会議どころではない、どんな時でも彼らの耳は音楽に向わずにはいられない。最後はサンガーの子供達のためのモチーフである。"きれいだな、このモチーフは。でも彼がこんなものでごまかそうたって..." 家長としての責任を背負っている少年セバスチャンはサンガーの息子でありながら、物腰のきわめて正しいチャールズ伯父さんの血もひいているのだ。

熱狂的な拍手喝采のうちに、音の洪水、ドカンと腹ごたえのあるシンフォニーは終った。家族の問題で頭を悩ませている最中でありながらセバスチャンはルイスの音楽を評価するのを忘れない。"指揮はとても立派でした、でも第2ヴァイオリンが音はずしましたね" たぶんサンガー一族にしか判らないこの音はロベルトやヤコブにも判る。しかし楽屋にきたフローレンスはヴァイオリンがすばらしかったと言う、怒りと憎しみを慰められたと言う。私は音楽の専門的なことは知らないが、ルイス独特のこの音は、常識的に美しいとされている音からはずれているのではないか。第2ヴァイオリンはつい、いつもの美しい音を弾いてしまった。ルイスの音が判ってい

なかった。ありきたりでない音こそがルイスの求める芸術表現であり存在価値そのものだ。創作者は独自の個性を理解してもらえた時に無上の喜びを見出す。感受性の違いがはっきりした時、ルイスはフローレンスに心おきなく別れを告げる。一つの音で人生は変わる。

——この音はどんな音なのか、具体的にこの音を舞台上で表現するにはどうすればいいのか——

セバスチャンはルイスとテッサの駆落ちを許す。決してテッサを捨てない、苦勞をかけない、少しはお金を稼ぐように務める、音楽をなげやりにしない、というのが条件だ。幸せに、なんぞという観念的な言葉を言わないのが彼らしい。“あなたにはむしろリンダのような女が必要なんです”と言われてルイスは“怒りと讃嘆の相半ばする気持”をおぼえる。この感受性、この率直さ、この生意気な少年が可愛くてしょうがない。薄情に見えるかも知れないが、自己保存能力に勝れている現実的なリンダのような女性の方が、芸術にのめりこんで周りを振り返られない男には都合がいい。ルイスの頭の中は音楽だけ“何も見えないし、見てもすぐ忘れる”芸術家である。演奏会当日もフローレンスにネクタイを結んでもらうつもりが、偶然そこに居たテッサに結んでもらう。誰であろうとその時のルイスには問題ではない、彼が必要としたのはただ“ネクタイを結んでもらう”ことだったが、とかく女性は“私が必要”と思いがちなものである。

演奏会は大成功だった。次の演奏会の申し込みが3つもあったとヤコブは興奮している。“私がルイスを発見したんですからねえ、サンガーも発見したんです”そしてサンガーを死に追いやったヤコブ。時代はサンガーからルイスに移った、さあまた売り出してやろう、ヤコブは鼻高々だ。トニーは美しく、子供も生まれてくる、ヤコブは幸せだ、この時は。

作者ジロドーは執筆当時の心境が、作品に強く反映されると言われている。この頃、第2次世界大戦前夜、ファシズムの足音が作者の耳にはっきり聞こえていたに違いない。イタリア人のロベルトは33歳、兵隊にとられる年令である、いづれイギリス人のルイスと殺し合うハメになるかもしれない。ナチの擡頭が迫っている、ミュンヘンに住むユダヤ人のヤコブはどうなるのだろう。少なく

とも、いろんな国の人が集まってヨーロッパ中をめぐり歩いて音楽会を開くという事はむづかしい、不自由な時代に向かっている。チロルの山荘での輝やかな日々はすぎ去った。

ルイスとテッサは、消防士と守衛という守りの専門家に送られ、劇場の王室用通路を花道として旅立った。だが着いた所は乞食小屋だ。ベルギーのブリュッセル、かつてサンガー一家が暮っていたマダム・メエの下宿である。ドーバー海峡のひどい船旅、24時間飲まず喰わずでたどり着いた所は、恐ろしくみすばらしい。固くて冷たいベッド、騒音と悪臭。気楽な居心地の良さは思い出にすぎなかった。ルイスは銀の豚小屋で甘やかされたせいも我慢できない。ますます工合の悪くなるテッサ、たちまちお手上げになるルイス、そうだチャールズ伯父さんに預けよう。ついで手紙を書いたことのないルイスだが、今は自分がやらねばならない。苦しんでいるテッサのすぐそばでワキ目もふらず手紙に熱中する。やっと書き上げた時、テッサはひっそりと死んでいた。かつてサンガーが子供をつくった家で、乙女のままで。

テッサは自分を消すことで愛を全うした。愛する人が一番ほしがっているものをあげたのだ。ルイスにとって一番価値のある、求めてやまないものは自由だったから。テッサ自身も愛から自由になるために死が必要だった。父の愛人だったガブリエルに、母の恨みをぶつけているところを見ると、彼女も女である。サンガーを見て育ててきたのだ、いづれルイスがコーラス隊が出来るほど女性をつくることは目に見えている。丁度いい時にテッサは死んだ。このために彼女は病弱に設定されていたのだ。作者はテッサにハッピーエンドをあたえた。

ところで、「浪花恋しぐれ」という演歌がある。自由奔放な落語家、桂春団治をモデルにしている。どこにでも気儘な芸術家は居るものだ。彼らはドラマに必要な人材なのである。

“芸のためなら女房も泣かす

それがどうした 文句があるか”